

青丘文庫研究会 月報 No.245

2010年7月1日

青丘文庫研究会 〒657-0064 神戸市灘区山田町3-1-1 (財)神戸学生青年センター内
TEL 078-851-2760 FAX 078-821-5878 <http://ksyc.jp/sb/> e-mail hida@ksyc.jp
①在日朝鮮人運動史研究会関西西部会 (代表・飛田雄一)
②朝鮮近現代史研究会 (代表・水野直樹)
郵便振替<00970-0-68837 青丘文庫月報>年間購読料3000円
※ 他に、青丘文庫に寄付する図書の購入費として2000円/年をお願いします。

●エッセイ●

峠三吉と朝鮮人 宇野田 尚哉

「ちちをかえせ ははをかえせ」の詩句で知られる原爆詩人峠三吉(1917.2~1953.3)と朝鮮人との関わりについては、おそらくあまり知られていないだろう。

胸を病んで床に臥せりがちであり、キリスト教の洗礼を受けてもいた峠三吉は、戦前・戦中を通じて、そして戦後もある時期にいたるまでは、実生活においても作品においても社会と交わる場所の少ない、生粋の抒情詩人であった。その峠がのちに『原爆詩集』にまとめられるような作品を書き始めたのは、戦後広島市の文化運動にやや年長の先輩格として加わり、若いコミニストの仲間たちと交わるなかにおいてであった。

峠にとって大きな転機となったのは1949年である。4月に咯血して死に瀕した峠は、枕元に若いコミニストの友人を呼んで日本共産党に入党した。そして幸いにも回復すると、日鋼広島争議(6月)に闘争詩「怒りのうた」を寄せ、それが大衆の前で朗読され共感を集めるという経験をするなかで、急速に詩をもって時代と向き合う詩人へと生まれかわっていく。その峠を中心としてこの時期を代表するサークル詩誌『われらの詩』が創刊されたのは、この年の11月のことであった。



ところで、峠は、1949年には、広島の朝連(在日本朝鮮人連盟)の8・15朝鮮解放記念日の集会のために、シュプレヒコール「人民解放の歌」を書いている(『峠三吉作品集』上巻)。このときのシュプレヒコールには、のちに『われらの詩』に結集することになる峠の若い仲間たちも出演して、「人民抗争歌」や「解放の歌」を歌ったようである。のちに『われらの詩』第8号(1950年8月6日発行)に掲載される増岡敏和「その炎はどこで燃えるか」は、朝鮮戦争勃発直後の朝鮮問題声明書配布事件(7月)で追われる身となった朝鮮人の友人のために書かれた作品であるが、そのなかの「私はこの雨の中に/日本語流で人民抗争歌をおくる/ノードンチャワ ノーミンデルン…」といった詩句は、49年のシュプレヒコールのような経験があつてはじめて書かれえたものであつたはずである(ただしカタカナ書きの歌詞は「解放の歌」の歌詞である)。

このように、峠が詩をもって時代と向き合う詩人へと生まれかわっていく過程とは、同時に朝鮮人と出会っていく過程でもあつたのであるが、シュプレヒコール上演直後の9月8日には団体等規正令により朝連が強制解散・財産没収という大弾圧を受けたように、以後急速に情勢

は緊迫化し抑圧は強まっていった。

そのようななか、1950年6月25日には朝鮮戦争が勃発した。そして、朝鮮戦争勃発後最初の8月6日の広島では、大量の警官が動員され、集会やデモが禁止されるなかで、繁華街の福屋デパートから路上に向けて大量の反戦ビラが撒かれるという事件が起きた。峠の詩作品「一九五〇年の八月六日」（『原爆詩集』）などを通じてなかば伝説と化した、占領下の広島での反戦の闘いである。ところで、この闘いについての日本人の回想（『占領下の広島』など）では一言も触れられていないことなのであるが、青丘文庫研究会での黒川伊織さんの報告でも強調されていたように、この闘いの実行部隊のかかなりの部分は朝鮮人の青年たちによって担われていたようである。朱碩『在日として 被爆者として』によると、自身も被爆者である姜一龍という青年がこの闘いに実行部隊として加わっており、この姜青年は自身が詩を解するというわけではなかったが峠を高く評価しガリ刷りの『原爆詩集』を売り歩いていたという。峠の詩は、このような時代状況のもとで書かれ、そして読まれた。

峠の『原爆詩集』が朝鮮戦争下でまとめられたという事実には、よく注意する必要がある（1950年11月からの入院生活中に執筆。1951年9月ガリ版で刊行。青木文庫版は1952年6月刊）。峠に自身の被爆体験を『原爆詩集』というかたちで表現させたのは、朝鮮戦争にはかならなかった。その限りで、峠は、「原爆詩人」であると同時に、「朝鮮戦争詩人」でもある。そして、峠自身は朝鮮戦争の休戦すら見ぬまま逝ったことを考えると、彼の詩句を朝鮮戦争という時代状況から切り離して反戦平和のお題目のように取り扱うのが適切であるとは私には思えない。峠とその若い仲間たちの文化運動のネットワーク（そこには朝鮮人も含まれる）を復元しつつ、彼らが朝鮮戦争の衝撃のもとで被爆体験を文学的表現へと昇華させていくさまを跡づける、という作業は、戦後、戦争体験がいかに思想化されたか／されなかったかを考えていくうえでも、非常に重要な作業であるだろう。

第318回在日朝鮮人運動史研究会関西部会 2010.4.18

「第一次共産党」と在日朝鮮人運動 ーコミンテルン文書による再検討ー 黒川伊織



本報告では、創立期日本共産党（以下、「第一次共産党」とする）と朝鮮共産主義運動の関係性を、コミンテルンの介入により生まれた不可避的な連関性として位置づけ、帝国支配に介入するコミンテルンという対抗軸を前景化することにより立ち現れてくる新たな帝国史の一環として、「第一次共産党」と朝鮮共産主義運動の具体的かわり、近年公開が進むコミンテルン文書の検討から明らかにした。

1920年10月、朝鮮人・李春熱の要請をうけて大杉栄が上海へと渡航し、コミンテルンとの初めての直接接点をもつことになる。また、1921年4月の「第一次共産党」成立にあたっては、日本へ派遣された朝鮮人・李増林の示唆があった。このような朝鮮人密使の活動は、コミンテルンを頂点とする世界的ネットワークの一環に日本共産主義運動を組みこむうえで決定的役割をはたすとともに、帝国日本への抵抗としての国際共産主義運動という戦略を「第一次共産党」にもたらすことになった。「第一次共産党」は、1922年9月24日付英語報告書において、「朝鮮人の独立運動をさまざまな方法で支援する」ことを述べており、コミンテルン第4回大会（1922年11月）のために起草した「22年9月綱領」の末尾では、朝鮮・中国・日本の三国の国際連帯こそが、極東革命のみならず世界革命のための重要な一環であることが

述べられていた。このように、「第一次共産党」が帝国への抵抗の不可欠の要件として日本・中国・朝鮮の連帯を位置づけた背景には、日本国内における朝鮮人共産主義グループの活動や、彼らと「第一次共産党」の共同行動の経験がふまえられていたということがあるだろう。

ところで、朝鮮人共産主義者間の激しい対立関係は、コミンテルンにとっても看過しがたい問題であった。1922年10月、朝鮮人共産主義グループ間の対立調停のためヴェルフネウジンスク会議が開催されるが、なお対立は解消せず、コミンテルンはウラジオストクにコルビュローを設置して、新たな朝鮮共産党設立にむけた動きを本格化させていた。コルビュローがウラジオストクに設置されたことは、コミンテルンの極東戦略と密接な関係があり、コミンテルンは、日本軍のシベリアからの撤退をうけて、以降極東への積極的関与をすすめるべく、1922年12月にウラジオストクへの極東ビューロー設置を決定していた。1923年2月15日付で極東ビューローより日本共産党中央執行委員会に送付した英語書簡では、「第一次共産党」がソウル共産主義組織との緊密な連絡を構築することや、日本在留の在日朝鮮人共産主義者が日本共産党の一セクションを構成すべき必要性があげられていた点に注目すべきであり、以降の「第一次共産党」は、朝鮮人共産主義者との連携を具体的に深めてゆくことになる。1923年2月開催の「第一次共産党」の市川大会では、政治部に付属して朝鮮部が新たに設置されたが、朝鮮部は日本在留の朝鮮人共産主義者のなかに存在する対立関係を解消するために積極的活動を展開していたとされる。

「第一次共産党」の機関誌『赤旗』（1923年4月）には、アンケート「無産階級から見た朝鮮解放問題」が掲載されるが、これは「第一次共産党」が朝鮮問題へ積極的な関与をすすめてゆくとする意志を具体化したものであった。回答を寄せた日本人27名の意見は、①帝国日本の支配体制の転覆により朝鮮解放を実現しようとするもの、②日本人・朝鮮人が同一組織を形成することで、協同して帝国日本の支配体制を転覆させ朝鮮解放を実現しようとするもの、③植民地の放棄・解放を第一義的に日本政府へと要求しようとするもの三類型に大別できる。①②のような把握のあり方は、「第一次共産党」が民族問題を階級問題に還元したものとして批判されてきたのだが、コミンテルンが「第一次共産党」への日本在留の朝鮮人共産主義者の加入を求めていたことを考えると、この認識はコミンテルンの意に沿った、当時としては当然なものであったともいえるのである。

そして、1923年6月、ウラジオストクに設立された日本共産党在外ビューローは、その任務に朝鮮共産党の内訌解決をかかげることになるが、これはコミンテルンからの要請であった。しかしながら、関東大震災によって「第一次共産党」の活動は壊滅的打撃をうけ、朝鮮共産主義運動への積極的関与というコミンテルンから与えられた課題は、「第一次共産党」の立て直しという喫緊の課題を前に後景化してゆくことになった。このように後景化していった要因のひとつには、関東大震災を契機として多くの日本在留の朝鮮人共産主義者が帰国を選んだということもあるだろう。以降1924年4月の「解党」にいたるまでの「第一次共産党」の活動は、朝鮮問題を後景化したかたちで展開されてゆくことになるのである。



●青丘文庫研究会のご案内●

■第321回・在日朝鮮人運動史研究会関西部会

7月11日(日)午後1時～5時

①「1945～60年の在日朝鮮(人)文学

—雑誌資料の紹介を中心に— 宇野田尚哉

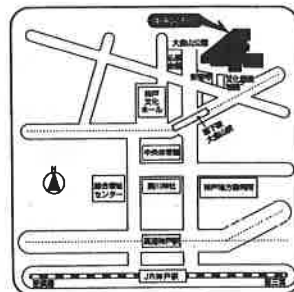
②「一九一〇年代在日朝鮮人留学生メディアの成立

—印刷所と広告の分析からみる留学生と日本人企業家の関係—

小野容照

■朝鮮近現代史研究会はお休みです。

※会場 神戸市立中央図書館内 青丘文庫 TEL 078-371-3351



中央アジアのコリアンを訪ねる旅 2010.4.30～5.8 カザフスタン、ウズベクにて
(レポートが『むくげ通信』240号、2010.5にあります。希望者は、80円切手4枚をお送りください。)

【今後の研究会の予定】

8月はお休み。9月12日(日)在日(水野直樹)、近現代史(塚崎昌之)、10月10日(日)在日、未定、近現代史(梶居佳広)。研究会は基本的に毎月第2日曜日午後1～5時に開きます。報告希望者は、飛田または水野までご連絡ください。

【月報の巻頭エッセイの予定】

9月号以降は、太田修、小野容照、梶居佳広、高正子、斉藤正樹、坂本悠一、砂上昌一、高野昭雄、全淑美、塚崎昌之。よろしくお願いします。締め切りは前月の10日です。

【編集後記】

- 最近、神戸と朝鮮人をテーマにしたフィールドワークの案内を頼まれることがあります。強制連行関係の<神戸港 平和の碑>、神戸電鉄のモニュメント、東福寺などを案内しますが、先日のフィールドワークでは、青丘文庫と大倉山公園も案内しました。青丘文庫は一般的に入りにくいところなのでこのような機会に訪問していただくのはいいことだと思います。青丘文庫のある神戸市立中央図書館はむかし「大倉山図書館」と言われていました。伊藤博文のスポンサーでもあった大倉喜八郎の別荘があったところで、アジア・太平洋戦争の時期に金属供出で撤去された伊藤博文像の巨大な台座(ほんとに大きいですよ……)も残っています。この台座を未見の方は、是非、お立ちください。
- 2010年度の青丘文庫研究会会員証ができました。申し込まれた方には本号に同封しています。会員は月報の年間購読料3000円を支払うことが条件で、例外として月報をe-mailだけで受け取る方で希望者には会員証を発行しています。ご理解をよろしく。(飛田)